富仁親王嵯峨錦

作者　紀海音

序詞山は高きにあらされども。仙あれば即ち名あり。水は深きにあらされども。龍あれば即ち靈なり。廬山の瀧孤山の梅。李伯和清が愛吟より。其名も高き日の本や。百世重なる天皇の。徳は富仁親王のオヒシへ政事こそ。やごとなき。色香も榮ふ御齡。まだ廿年の若草に。籠るてふその業平に類へる玉の御形。風雅の名さへ著き永享元年暮秋の空。千世の古道嵯峨紅葉行幸の車大井川。汀に向きて玉座を占め御遊覽とぞ聞えける。供奉の卿相雲客より菅家江家の儒士博士。連る袖の色替へて。末座に笹目の千王丸。今日の舍人を蒙り強力不敵の若男。瑤輿を守護し坐したるは　フシいかめしう。こそ見えにけれ。地色中にも關白兼定公笏取直し謹んで。詞物として捨てざるは天地の公。君のめぐみの深き事八入に照れる紅葉も。景色を添へ候と壽き立てゝ奏せらる　地色親王御機嫌麗しく朕太平の餘風を慕ひ。往昔仁明天皇の。芹河の行幸に準へ。詠歌の興に君と臣相和ぎて樂しみを。下に施す一節と思し入りたる和歌の題紅葉水に映るとの御製は斯うぞ聞えける。もみぢ葉の影も流れず大井川。散らぬ梢を筆にして。地恭くも御震翰御短冊に染め給ひ。都の錦名所の褒美に何か惜しまんと。流れに添うて投げ給ひいざや面々目前の。趣向はいかにと宣へば。兼定公を初めとし我も〳〵と公卿達。長歌短歌混本歌。詩連句漢和俳諧口。千言萬句綴り添へ色紙短冊とり〴〵に。浪に浮みし有樣は陸奥山の黄金花　オクリ入日へに洗ふ如くなり　地色入興の餘り人々はヤア千王丸。詞日頃は無骨なりとても今日の瓊筵に。一人洩るゝは一座の恥流行歌の一句でも。覺えた事を書き出だせいかに〳〵と宣へば。地ハツト答も荒男のつさ〳〵と御前に出で。詞分相應の役目には川波に飛込んで。或は水練立游叡覽に供へんと肌に。油を乘せたるに。存じの外の御所望迷惑至極さりながら。地御恥辱とある上はたつて辭退もいかゞなり歌や連歌は氣がかはらず。わつさりとやつてくりよ。歌龍田川にはちんちり紅葉を。流すよほんをさとなとさよんよえ。ナホス君を始め奉り　フシ各興に入り給ふ。地色時に尾上の方よりも紅葉につれてちら〳〵と。吹かれて來る板繪馬御前にこ

そ落ちにけり。地親王取上げ見給へばいと細やかなる彩色に。美女の姿を畫きなし願主狩野の雪姫と。讀み終つて宣ふは。詞女の繪師と譽ある雪姫が筆ずさみ。地聞くに勝りて妙なるかなかゝる器量を蓬生に。埋もれ置くこそ本意なけれ。まだ獨居にあるならば宮仕をも勸めよかし。兼定いかにと綸言あり。詞さん候此雪姫儀は。某が家臣膳手織部が娘。折を伺ひ御階迄召連れお目見え遂ぐべき所。丹青修行に暇なく空しく打過ぎ候なり。又此繪馬は雪姫がわりなき夫婦の其仲に。子を設けたき祈願に　り我姿を書寫し。松の尾の明神へ奉納せしと聞きつるが。地山威に誘はれ君の御手に入りし事。民の子を安んずる願成就の吉相と。フシ委細にこそは奏せらる。地色親王由を聞し召し。なに此繪馬は雪姫が姿筆に寫せしとや。心にくやゆかしやな彼が風流聞くにつけ。夫が知り度し何者と勅諚あれば兼定公。詞されば候何時頃より。馴れ馴染しは知らねども夫はあれなる千王丸。地委しき契は召出して御尋ねあれかしと。座興を交ぜて勅答ある。親王世になく打笑ませ果報いみじき千王丸。骨柄に似ぬやさ者よな汝が癖の腕立にて。雪女は仕留めうが雪姫には消えゝと。なだれて溶けて何時の間に子持と迄はしたゝるき。願ひごとやと冥加なき御戯れの言の葉に。もぢ〳〵として千王丸　フシ顏を赫めて居たりけり。地色爰に蟠海僧都とて親王の御兄宮。高雄にまします御許より百濟師國使者として。玉座間近く畏り。河邊の行幸先達つて　主君僧都承り幸ひ御寺も程近し。所は名に負ふ高雄の奥。春を歎く紅葉は此地の及ぶ事ならず。地旅宿の席を相構へ臨幸願ひ奉る。御迎ひに參上と　フシいかめしげにぞ申しける。地色兼定公は豫てより僧都の惡心察する上。今師國が面魂害を含むの計略と心に込めて宣ふやう。詞ム、御連枝の因みとて思し寄つての御招待君御叡感さりながら。逸遊逸豫の樂みも過ぐれば民の煩ひたり。此地への行幸は先例を追ふ所。高雄に一宿あらん事安きに誇る誹を受け。朝政事怠らば下の訴へ滯り。君一人の御過無益の結構叶ふまじと。言葉正しく返答ある。師國頭を上げ。コハ心得ぬ御言葉差當つては御兄宮。御慈の招待に四の五のあるは無體の沙汰。地又朝廷の行ひも天子に代る關白殿。御一宿の其間捌きに違亂あるべきか。近頃狹き胸中とフシ嘲笑う。てぞ居たりける。地色親王つく〳〵聞し召しげに同胞の睦まじき。使がねとは言ひながら。政事には替へ難し。高雄山の風景より民の竈の賑ふこそ。朕が詠めの紅葉なれ外に求むる樂し

みなし。歸りて此旨申せよと　フシ悠々としておはします。地色師國溜息ほつとつぎ。詞天知る地知る人知るとて何處ともなしの取沙汰に。親王の御事はもとより女帝にまします故。廿歳を過ぎ給ひても お后もなく女御もなく。華奢風流の御容顏合點が行かぬと思ひしに。關白殿を始めとし登山厭がり給ふ事。高雄は女人結界故行き詰つての冒葉爭ひ。尤もかな知れた〳〵。地よしは女帝にあらばあれ其時こそ僧都の行力。いかなる魔障ありとても退け給ふは案の内。骨肉の御仲にさのみな包み給ひそと。さも憎さげに言放す。兼定大きに氣色を損じ。詞ヤア勿體なし師國。天子の御身に謂れなき難題を云ひかけるは。汝が當座の雜言か但し僧都のお指圖か。出家の御身に惡心のあるべき樣には思はねども。地只今の一言にて愈遷幸なし難し兎に角還御を急ぐべし皆々用意とありければ。師國は大音聲。詞忝くも蟠海僧都一の宮の命を請け。勅使に等しき某むざ〳〵とは歸られず。其上行幸ならずんば女帝の噂も廣うなり。世の人口も笑止なり無禮は却つて忠義の道。地否とあるなら玉體を無體に供奉し申さんと　フシ傍を睨んで立つたりけり。地色千王今は堪へ兼ね末座よりつゝと出で。詞ヤア師國とやらどろ國とやらいかつけに喧しい。僧都とは誰がこと。兄弟にもせよ親にもせよ。世を離れたる拾坊主我儘の願ひ事。却つて御遊の妨げし二歳め迄がいご〳〵と。身體に過ぎたあどた骨捻ぢ歪めんと飛びかゝるを。地親王は御擊を上げそれ制せよと宜へば。公卿の面々取付きて　オクリ漸々へかしこに押込むる。地色親王玉顏穩に師國が云ふ所やぶさかなるに似たれども。詞女帝となき名冒ひ立つる世上の噂捨て置かれず。其上僧都へ立つる道直ぐに行幸を催すべし。今日此所へ來たる事誠は朕が下心。紅葉より猶色深き女の風儀を見そなはし。心に叶ふ者あらば貴賤に依らず召し入れて。后に立てん爲なるぞ。然れば高雄山とても。三月廿一日は女人も山へ詣づるとや。來年の例日を明日へ取越して。我參詣の作善のため女人の參りを赦すべし。近國へ相觸れべし僧都の行力頼まねど。佛法王法二つなき朕が許すと云ふ言葉。世界國土の海山も草木もなどか背かんと。虎の威あつて猛からぬ君子の。道こそ　三度末廣きフシ法に形は。地染めながら心は貪欲一の宮幼立より御行跡邪にまします故。押して出家になし參らせ山家の住居朝夕に。無念の烟焚き添へて護摩にふすぼる顏色も。萠黃縅の腹卷に筋金入れたる樫の棒。馬手に掻い込み飛ぶ如くせきに急いたる目の内に。

天地をはつたと睨み付け。詞先帝一の王子と生れ萬乘の位に卽くべきを。胴慾な親心二の宮を寵愛し。左右の大臣媚びへつらひ親王を位に卽け。罪なき我を此如く無體に剃つて剃りこぼたれ。地爵慣遂に散ぜんと時節を待ちて待ち畢せ。今日嵯峨の行幸こそ天より我に讓る所。賺し寄せて害せんため連枝の因みを託けに。詞師國を遣はせしに待てども〳〵歸らぬは。察するところ謀計を關白めに悟られ。からめられしは必定とても露顯の上からは。地討手を待たず逆寄して一戰に勝負せん。フシ方々いかにとありければ。地色岩飛の脫天坊霧間の時夜叉始めとして。前後不覺の惡僧ども異議にや及び候と。勇んで中途に駈け向ふ然る所へ師國。競ひ切つたる戻り道兩方はたと行合ひたり。詞僧都怒つて大聲上げ。ヤア臆したるか師國。事延引に及ぶと言ひ親王をも供し來らず。のめ〳〵歸る狼狽者鬼角の返答聞く迄なし。直ぐに向つて片端目にもの見せんと駈出づるを。師國縋つて引留め。お急きなされなぬかりはない。拙者が辯舌武勇にて首尾よく當山行幸の。勅諚下り候と仕濟し顏に云ひければ。僧都顏色打解け。さぞあらんと思へども。一大事の競口仕損じたるかと氣遣ひたり。地サア彼奴等が命は寢腐つた天が下は一呑みと。勇み躍れば脫天時夜叉共に浮れていき〳〵と。物にも足らぬ公家ばら糠粉を斬るより易い事。手應へのある相手もがな高名をして遊ばんにと。フシ雜言たら〻〻言ひ散せば。詞師國は頭振り必ず御油斷なさるゝな。親王若くましませども天子の御位備りし。威勢を四海に振はんため結界の地を踏み破り。明日女人の參詣を許すとあるの宣旨こそ。凡慮の及ばぬ御發明。關白もとより智謀の臣舍人に笹目の千王とて勇猛無双の若者彼めを拉がぬ其内は。滅多に天下振られぬとにが〳〵しげに訴ふる。僧都からからと笑ひ。のさばり過ぎた勅諚顏智慧が却つて害となり。身の亡ぶべき前相女人の參詣許すこそ。これ此方の究竟一。地智略を以て討ち取らんに何條仕損じあるべきと。手に取る如き廣言に皆手を打ちて頷き合ひ。天晴智慧の山ばかり芋掘り坊主にあらざれば。げにさも僧都とそやされて。自慢に鼻も高雄山本坊指して三重へ歸らるゝ。フシ大君の。勅をば笠に着て。高雄の紅葉踏み分くる。女につれて男すら貴賤群集の廢合も。咎めず搖ぐ袖と袖。錦の世界ぞ賑しき。地色參詣多き其中に戀と情の色合は。こんなものかと夕顏の昔をかの雪姫は。見おろす程の顏容貌。今日は實して出立場へ小オクリひらり帽子に抱帶しやんと締めたる風俗も。

浮れて輕き飄箪の。腰元仲居風呂敷にちよつと小提の手なぐさみ男思ひの氣配りを。フシ行幸の道を慕ひ行く。地色山の麓に御車の轅に凭れふら〳〵と。小居眠りする千王丸退屈らしい舍人役。伽欲しげなる顏付とつか〳〵と側に寄り。懐へ手を差入ればびつくりとして大欠伸。詞扨々づなうほされる事。ホウ女房ども。夫の留守の氣儘歩き近頃以て無作法至極。地後生は内でも顧はるゝつい拜んで早歸れと。只一口も仕人なり雪姫は打笑ひ。詞ほんにマア心を知つてゐればこそ。添寄りのない物言ひ。物詣は附けたり。女の繪師と云はるゝから屏風掛地の度々に。地櫻は吉野紅葉には高雄の秋を寫せども。目に見ぬ事は覺束なくお許あるを幸ひと。辿る〳〵も參りしが。目馴れぬ山の景色より矢張見つけてお前の顏。眺めて遊ぶが面白い。ハアいかう草臥れたちと爰貸してと膝の上。凭れかゝれば突倒し。詞あた見苦しい舌たるい。七尺去つて師の影踏まず。八尺去つて男の顏拜んで居よとは古人の戒め。飛退つて長れ。フウ仰山な。内證の魂膽は聖人でも同じ事。地こんな處で和いで人に羨りがられてこそ。打晴れての女夫なれ。色アヽまよ。地色そんなら獨樂しむじやと立退いて小提重。仲居腰元打交り フシさいつおさへつ酌交せば。地色千王じろ〳〵打守りハレいかう氣が盡きた。八尺の内二三尺間には大事もない事と。言葉の下よりそれ〳〵〳〵。詞ちつとぞうもどさるまい。重ねては道なかで抱付くが合點かヲ、後は後目のまへのたつた一杯〳〵と。地互にわりなき酒機嫌凭れ合うたる袖袂。頭隱せど尾上より還幸なりと呼ばはつて。親王關白僧都迄御下山あればうろ〳〵と。廻る車の前後隱れへかねてぞフシ見えにける。地色兼定公擊をかけ御許さるゝ苦しうない。罷り出でよとありければ。ハツト答へて兩人は顏見合せてうぢ〳〵と。フシ玉顏近く長る。地色親王御氣色麗しく千王が妻雪姫よな。詞風流と云ひ形と云ひ例稀なる繪のたくみ。幸ひ所も高雄山其外古歌に詠み置ける。名所名所の紅葉の色葉めて爰に眺め度し。寫して見せよと勅諚ある。雪姫額を地に着けて。詞拙き女のすさみ迄召し上げ給はん綸言は。地身に餘りたる嬉しさも。畏多く候と フシ言葉の品も優しけれ。詞兼定差寄りコレ雪姫。勅諚いかで背くべき地即ち是に畫けよと扇と硯賜びければ。ハツトばかりに押戴き。墨擦り流し筆を染めオクリ一々〳〵次第に。寫しける。先づ紅葉の名所の其色品を自らが。筆の稽古は青葉なる稻荷の山の若楓木の下。闇のフシ紫みより。更け行く秋の。一入に。

八鹽の末を契りては長くもがなと命毛の。榮を祝ひ書そめける。次に寫すは鏡山もみぢ。重ねの。色々の伊達を仕立つる襟付も。對の白無垢霜の綿。霧を伽羅とも。燻らせて。世に見せ顏の粧を。心にこめて畫くなり。さて其次はかけまくも。かしこき。神の愛で給ふ龍田の。川の波の面渡らば中やたえなんの。御製もげにや一樣にくだし掛けたる唐錦。一際目に立つ眺めとかや。

さて又爰に。名にも似ず。笠取山の村時雨盛りて零れてさつ〳〵さつと。絕間に。殘る虹よりも。朱を見せたる下紅葉戸無瀨の。瀧の折掛けてめぐり流るる粧は。雪ならねども山の帶。風にほどけて日に晒し結び。止めて。止まらぬ秋の行方ぞ惜まるゝ。分てゆかしき風景は。定家卿の住み馴れし昔を爰に小倉山。これ敷島の道しあり。妻呼ぶ鹿も紅葉散る。跡を尋ねてかいろと鳴くはしほらしや。さてしほらしき。山里の名所名木とり〴〵に盡きぬ。水莖あらましを。かくとばかりに□□て御前にこそ差上ぐる。親王叡感淺からず□□□て被物。數々積る雪姫は御暇下されて家路にへこそは歸りけれ。然る折節時ならぬ撞鐘しきりに呻り出し。大地も碎け落つる音山家崩るゝ如くなり。各是はと聞く所に山をくだりに百濟師國。息氣を切つて駈來り僧都の前に畏り。扨も不思議の事候。當寺の撞鐘故なきに火焔となつて失せ候。いかなる障碍あるやらん急いで歸山遊ばせと。事ありさうに訴ふる僧都ハツト仰天顏。コハ一大事ござんなれ忝くも此鐘は。宇多天皇の勅願にて橘の廣相。菅原の是善卿藤原敏行。言葉と筆を殘せし故世に三絕と稱せられ末代の靈物。今退轉に及ぶ事天下の凶事を示すのか。佛法破滅を告ぐるのかあら氣遣はしの變災と。言ひもあへぬに山上山下太鼓を鳴らし法螺を吹き。脫天時夜叉兩惡僧與力の大衆鎚長刀。得物々々をひらめかし遁さぬやらぬと聲々に。親王目がけ取卷いたり。脫天坊眞先に進み出で。怒れる眼はつたと見開き。ヤア〳〵親王よつく聞け。當山神護寺の御事は弘法大師の開基として。眞言秘密の道場。六百餘年の掟を背き天位に任せ時ならぬ。女人の參詣許せし事中興文覺是を怒り。靈魂我に入代り邪の政正さんためにに來りしぞ眼前思ひ知らせんと。罵りをめく有樣は恐し。なんともおろかなり。兼定少しも騷ぎ給はず。ホホウ文覺の魂とて新しい事承る。法の掟を背くにこそ。一年一度は許されて女人の參る道場故。其當日を今日に取越せとある勅諚は。大善根の結緣佛

神感應あるべきに。物咎する文覺坊現世におはする其時も。頼朝に頼まれて平家の世をば覆し。又六代に頼まれては二度源氏を亡さんと。謀叛好きな癖あれば魂魄とても其如く。又何者にか頼まれて叛逆一味の企てと。睨んだ眼は違ふまじ。サア眞直ぐに白狀と 地 理正しき一言に。返答ぼつと行當る暫くしらけ居る所に。後に控へし師國俄にうんとのりかへり。悶絶したる有樣にてやがてむつくと起き上り。 詞 方々知らずや我はこれ。當寺建立の本願人和氣清麿が靈魂なり。そのかみ仕へし孝謙天皇行跡無道にましまし。罪なく遠流に處せられたる鬱憤今に止む時なし。根を同じうする女人の參詣。許して靈地を穢させし。遺恨は親王汝にあり。 地 立ち所に懲しめんと フシ 氣色込うでぞ挑みける。 地 千王焦つて飛んで出で進む惡僧五六人。引掴み〳〵投げ散しつつと立ち。 詞 ヤア兩人のへろ〳〵怨靈。某を見知つたか。日本無雙のわやく者金平が幽靈。婆婆の騷動聞くよりはや八萬地獄を脛にかけ。でんぐりかへりして駈付けた。鬼友達と附合ふ故人食ふ術も知つてゐる。 地 おのれ等動くな片つぱし坊主首を引抜いて。鼈料理の生醤油。 色 しゆつ〳〵しゆつと 地 云はせんと。ふんぢがつたる有樣は フシ 閻魔の從弟も斯くやらん。 地 色 僧都は當の違うたる顏青ざめてきよろ〳〵と。氣色を直し追從聲天晴れ健氣な若い者。 詞 手柄次第に何ぼうも首引抜いて遊ばれい。 地 愚僧は寺に立籠り靈魂鎭めの護摩を焚き。御代は長久親王の鞏固を祈り申さんと。挨拶ロも跡や先 フシ 山上指して逃げ歸る。 地 色 千王可笑しさたまられず。 詞 ア、蟠海殿手が悪い。俗は熱火を子に拂ふ。僧都は惡事を弟子坊に塗つて〳〵塗り坊主。 地 まめな足元逃げ振りと フシ 大手を打ちて笑ひける。 地 色 時夜叉進んで下知をなし物な云はせそ打ちひしげと。切先揃へて切つてかゝる。 詞 ヲ、面白し〳〵。 歌 もみち踏分け鳴く鹿の ナホ 地 胴骨肩骨膝頭。藥食ひには重疊と大手を廣げて 三重 へ追ひ廻す フシ 中にも猛き。脫天坊。組みにかゝるを事ともせず目より高く差上げて。 詞 文覺坊と名乘れども誠はそでんかく上人。 地 精進者に取らせんと。敵の中へ投げ付くれば。微塵になつて失せにけり。此勢ひに恐れをなし四方へ別れて逃げてげり。 地 色 エ、膿病なる惡僧ばら逃ぐるは科を悔ゆる道。許すは仁愛深き道道の道たる親主の。還御を急げと御車に入るさの月の都の方。輝く威勢は八洲の外。疊込んだる兼定の智慧の明玉千王が。武勇は四海を覆ひたる天を。翔りし斑足王。山を劈く龍伯公。それよりも名は高砂の松の操に

準へて忠臣の種。と褒えける。

第二

孫眞人が三養にも思慮寡きを第一とす。然るに富仁親王は皇統萬機の政。民を養ひ世を惠む。古賢の教文の道夜晝絶えぬ御工夫に。御心疲れましますにや。盛りの花の顏はせも。フシ稍窶れさせ給ふ故。地色公卿の面々とり〴〵に叡慮を慰め申さんと。絲竹の遊び舞樂の興夜の大殿の添臥に。女御の入内六宮に更衣の袖を並べても。君御心傾かず鶯衾の褥もいたづらに。病鶯の明暮とスエテ震襟穩かならされば。地智化の老臣是を歎き。三臺五門四座七辨各御殿に出仕あり。地色かゝる所へ蟠海僧都心にあらぬ袈裟衣。苛高の數珠仰々しく殊勝つくつて參内あり。兼定公に對顏し。互に行幸の下心胸と胸とにありながら。表は慇懃やはらかに。詞遠路の御行駕御連枝の御慈愛深くまします段。千萬感じ入り候。ヲ、さればされば。親王寶祚長久と日頃に念ずる法力故。清麿文覺兩人の靈魂をだに鎭めしもの。況や當座の邪氣なんど一祈りにてさまさんと。地はる〴〵參着致したりさは云へ當卦本番の。星の祟か氣遣はしと。天文の書を取廣げ算木を並べ忝しく。詞ム、當年は丑の年。時は十月生は辰にて金性。ハ、ア先づ辰は陽にて天子の形。丑の年の陽に應じ金性水と相生し十月の陰を自得す。陽有餘の德に位し。地男子は病難の憂なし。女は當月陰の運に辰の陽氣を閉づの大病。踏み違へたら危物。世上の噂が僞りか皇子と云ふが實正か。二つの迷ひに蟠海は殆んど當惑致せしとフシ眉を。ひそめておはします。兼定につこと打笑ひ。詞吉左右の占の面先づは安堵仕る。御惱は追付け鎭らん。地皆々悅び給へやと共に壽なし給ふ。僧都顏色せき上げて。ア、とぼけまい諍ふまい。詞忝くも易道は伏羲氏の畫してより。孔子の天命佛神の。冥慮を照す鏡の面男子には病難なし。地それに違例とあるからは女帝には極りし大切の儀を僞つて必ず後悔致すなと。かさに掛けたるはね袴。フシ腰のさするぞ是非もなき。地兼定怒りを押鎭め。詞コハ心得ぬ御咎め。憚りながら占形の御傳授いまだ足らぬ故。總じて易は變易とて卽時の機轉が肝要たり。八卦の面に現はれぬ御惱は四百四病の外。地戀風といふ御惱み疑はしくば御容體。伺ひしろし召されよと寢殿に差寄りて。玉垂半ば卷き給へば。親王現なく心は餘所に空蟬の。霜待つ梢枯れ〴〵に。寄るべ涙に忍び音を。スエテ伴ふ枕押しやりて。稍起直らせ給ひつゝ。明暮御身を離されぬ繪馬取上げて打詠め。フシあ

ら美しやしほらしや。物言はず笑はねども。長地其、俤は生寫し天皇の身と生れても。叶はぬものは戀なるよな。詞楊貴妃却つて唐帝の思ひ李夫人去つて漢王の情。地それは遙けき別れの道。スエチ是は間近き芦垣の。同じ都の内ながら。餘所に許せし下紐の。解けて歸らぬ春の雪。フシ花踏み散す。鳥ならで。妹背語らぬ諸翅。憎やねたしや怨めしと。包むに堪へぬ御歎き。哀れはかなき風情なり。詞ハア一筋に思ふまじ。地色後朝に世を恨み待宵に身をかこち憂きつらい目は戀の科。心長う寢るこそは夢にも契る緣ぞと。衣引被き臥し給へば。フシ御簾さらさらと下りにけり。地色蟠海案に相違して稍暫し差俯き。王子と云ふには疑ひなし。非道の戀慕に迷ふこそ。我叛逆の元手よと。獨笑して打頷き。詞ヤア兼定。加持行力を頼まねども是程輕き病をば。何故療治致されぬ。唐天竺にもあらばこそ都に住める女論師。今迄油斷致されし心底いかゞと怪しめる。關白嘲笑ひ。イヤ御諚とも覺えぬ儀。彼には笹目の千王とて慥な夫ある事は。申さねど御存じ。君にもさすが慥ならぬ。地浮世を佗びての御惱み不義と見ては臣として諫をこそ入るべきに。女を奪ひ勸めよとは理不盡のお指圖と。理を正して述べらるゝ。僧都頻りに打笑ひ。詞定木を踏まへてくど〳〵と胸を焦すは下々の業。地氣慥に募るが天子の樂しみ。先例を尋ぬれば。詞白河の院は源の。仲宗を遠流せしめ。其妻を后に備ふ。祇園女御是なり又。永暦の帝には父天皇の女御になづみ。二代の后に立て給ふ是等さへあるものを。賤しき奴の妻なんど勅諚として召されんに。誰を憚る事あらんと。フシ傍若無人云ひ放す。詞兼定も笏取直し。入らざる貴坊の先例だて此方より申すべし。往昔唐の太宗は鄭仁基が娘を戀ひ。后に備へ給はんと入内の宣旨給はりしを。魏徵諫めて此女。陸氏に緣を結びしと申上ぐれば忽ちに。宮中を出されし。地是ぞ賢き世の例。よい戒を敎へずして惡しきを手本に引かるるは。國を亡す御思案かと。云はせも果てず。詞ヤア猶以て愚かなり。日月あつての世界なり。天子あつての政道よ。元を立つるは親王の一命。纏か雪姫一人を無道なりとて勸め得ず。焦れて必死に至りなば仁義はさて置き天下は闇。太子とてもあらざれば差詰め此蟠海を。還俗せよと勸むるとて。翻すべき心と思ふか。勿體なや〳〵。地一度遁れし塵の浮世。望むところ更になし。天津日嗣の絶えんこと。悲しうないか兼定。但し叛逆たくむかと。雜言云へば關白も顏色變つて聲を張り。詞すはと云へば手を出す御坊こそ

悪心よ。地いや其方が非義者と。フシ爭論次第に相募れば。地親王御枕を上げさせ給ひ暫し〳〵と押鎭め。詞四海の誹を憚るは臣下の忠義と云ひながら。地天下を庇ふ蟠海の志こそ嬉しけれ。片時も早く雪姫を禁裡へ召せよと勅諚あれば。公卿の面々顏見合せ フシ呆れて。答ふる者もなし。地僧都、一人したり顏。汝如きの愚痴者と論ずるは無益なり。衆生濟度は佛の慈悲。無體の戀路取持つは人を助くる行者の願力。元より名利を厭はねば掏摸とも太鼓坊主とも。笑はゞ笑へ云はゞ云へ。雪姫住家へ立越え縱へ夫の千王丸。孟賁夏育が勢あるとも。我また不動の縛をあざなひ。四種三密の金剛力にて引立て來るは今の事。心安かれ親王。氣遣ひするな公卿等と形は隨緣眞如の有樣。心は修羅の早飛脚焦つて。こそは 三重

狩野雪姫道行

本朝弓張る月の入る方や〳〵我が隱家と定めん。詞扨も笹目の千王は。親王非禮の機に殉じ。蟠海我が家へ來りしを。打擲の上追ひ返し。重ねて討手來るを待ち受け。腹搔き破るは易けれども。多年の忠義やみ〳〵と。泉下の土に埋んより。身を退きて日月の ナホスフシ明けき世を。松のとや。夫婦諸共旅姿心の駒に鞭打たす。足の乘物手の奴。杖と草鞋に案內させ。住みこし都を立別れ。フシ近江路指して出でて。行身の有。オクリ樣こそ。是非なけれ。名も逢坂の關ならば、追手を防ぐ辻占と女心に喜べば。夫は無念 フシ數々を。跡に見返る。山々の。緣を添へて麗しく。本フシ目馴れし我に餞と。立並びたる心地して。物に觸れても忍ぶ川アノ芦浦に。波風の立たで二人が行末も。猶守山と堅め合ひ。手に手を取りていそ〳〵と。袖振る肘振る腰を振る目狹き旅の。物憂さも。繼にはいとゞ 一中原野洲川に。群立つ千鳥友鶴の。あさる間もなく瀨を早め駒の渡りや徒歩渡り餘所にや人を ナホスフシ三上山。峯よりおろす スエテ榊葉は。猶萬代の數添ふる。挿頭の幣と吹き落ちて夫の髮や我が髻を。長地打拂ひ又撫で付けてそゝけを直す鏡山曇なき世を喜びても。いとゞ思ひは果しなき。野路の篠原篠竹の 小オクリしんき。しんきのふし込めて汝も憂目を知り顏に續く茂りも長等山。打過ぎ行けば渺々と。向ふに清き月出島。歌堅田浦よりコツチへお舟がお舟が。來るとヤツシツシ。詞艪櫂を揃へて押せヤツサ。琵琶の水。海月を見しよオホンしつとん。オホンしつとん〳〵 ナホスフシ空艪の音のよさと。旅の道草。老曾森。小石交りの霜霜の。裙に纏はれひ

た〳〵〳〵。避けて急げばしと〳〵と歩み苦しき足並も。波のうね野やまくず野の。荻も薄も刈萱もおのれ〳〵が。染模様。皆脱ぎ替て木枯の朽葉の錦装へる花の縁と。見返れば。玉のお山の村時雨さつと降り來る一しきり。つれなき松もおのづから。馴れてや近き床の山。岩がね枕苔筵。臥す猪鹿の音諸共に色を込めたる優景色。影恥かしや名取川。契は深き中々に心の憂さと。較ぶれば。猶も隔つる。二面見せばやこの手柏原泊も旅の習ひとて。二人が中に面白い夢も見果てず醒井の。流れも清き道のべに暫く。語らひ休みける。

地かゝる所に師國時夜叉大勢引具し駈來り。詞ヤア天罰知らずの下郎め。勅を承る僧都に向つて悪言吐き。地打擲したるあぶれ者いづく迄か遁すべき。命惜くば女を渡せさないと首が逐電せん。何と何とと罵つたり。詞千王から〳〵と笑ひ。性懲もない腕すんばいおのらが主人の梟入が。無體の顕たゝきし故拐碎かんとしたれども。出家の身を憚つて土足を上げて拔辮元。地そつと撫でたるぶんの事慮外もせぬ落度もない心ありての我が出國送つた賃に片端。握拳が所望かと捲り上げたる腕毛は。綱が鍛を摑んだる茨木童子も斯くやらん。さしもの同勢怖れなし互に譲り〳〵合ひ。進み兼ねてぞ守りゐる。時に遙の跡よりも兩人止れと聲をかけ。雪姫が父膳手繊部逸散に馳せ來り。詞ヤア粗忽あるな師國。貴殿は僧都の仰を請け私の遺恨なり。我は天子の勅命にて是迄追手に向うたり。若し此方の手に餘らば其時加勢を頼むべし。先づそれ迄は退いて見物あれと押隔て。やれ狼狽へたり夫婦の者。名に負ふ笹目の千王とて武道を磨く身を持ちて。地堪忍を辨へず漫に都を立退くは。女が惜いか追手がこはいか。心底いかにと尋ねける。詞千王丸聲荒らげ。討手といひ猶へ男の口から不挨拶。女の五疋三疋に袢打たるゝ男でない。天子に戀慕せらるゝは天晴果報の雪姫。參れと言へども頭を振り暇を與るれば死なうとほざく。地勅諚背けば討手の沙汰刃向ふ時は朝敵同然。天子に非義の名も立てず夫婦が節義も立てたさに。いづくになりとも影隠し世上の鳴を靜むるなり。聟の舅の遠慮はない入らざる止立致されなば。椽鶚棒を掉られんと切刃を廻し怒りける。織部騒げる氣色もなく。詞汝が申すは若氣の思案。普天の下卒土の濱落着く處皆王土。君に背いて天地の内いづくに足を止むべき。粗忽の至りと言はせも果てず。ハテ日本に住まれずば。地足に任せて唐高麗鬼ケ島へもつつ走り。廻一つで働いても夫婦が

口は養ふとえせ笑ふ。フシてぞ居たりける。織部いらつて聲張上げ。詞事可笑しき言分三千世界を乘越して忉利天に至るとも。朝敵不義の兩人を圍ふ者のあるべきか。覺悟極めて立歸れ。イヤ朝敵とは謀叛の輩。無道の君を見限つて國を立退く例はないか。ヤレ勿體なや親王を假にも惡しく言ひ散す。舌は八つに裂けぬべし心を鎭めてよつく聞け。國の主の御身として。御惱になる程雪姫を戀ひ慕はせ給へども。地道ならぬ義を辨へて押して召さるゝ宣旨もなく。關白其外公卿達それと色には悟れども。勸めんといふ臣下もなく君臣共に素直なる。惠は夫婦が身に取りて冥加に餘る事ならずや。詞然るに蟠海謂れなく取持ち顏に立越えて。汝に對して無體の所望邪とも狼藉とも。我と我との仲ならば存分に致す筈。されども僧都何人ぞ先帝の一の御子。地色君御連枝の御身體下衆の土足に穢すといひ。勅を背いて立退くは朝敵にあらざるか。サア返答と詰掛くる。詞千王丸ぎよつとして。ハア南無三寶しなしたり。地色生れ付いたる一癖にて。思はず知らず某は朝敵の名を取つたるか。エ、後悔や悲しやと鬼を欺く目の內に。涙はら〳〵男泣き大地にどうど身を投げて足擦したるばかりなり。親と夫の諍に。心も消ゆる雪姫は。互の胸を推量り。我身の上を思ひやりかつぱと伏して。泣き叫ぶ。織部も共に涙ぐみ。ヲ、ことわりなり フシ道理なり。君も哀れと思召し關白公も兎や角と。御思案を廻らされ今改めの勅諚あり。歎を止め承れ。詞綸言の旨別ならず。親王わりなき好色を晴け難なき御餘り古へ美人の譽ある小野の小町が俤を。寫させて見るならば色品ともに雪姫が。地姿絵よりは莠るべし增す花あらば今迄の。戀は忘るゝものぞとて兼定是を承り。道の工に云付けて絵に書き又は木に刻み。數多叡覽致せども御心に止まらず。詞弘法大師の遊ばせし玉造といふ文に。小町が盛の顏ばせより老の波寄る腰付迄。少しも變らず書き記し寶藏に箱め給ふと聞く。地雪姫筆に妙なる上夫を救ふ誠をば。佛神に祈りても高野の御藏に納りし。正しき小町が姿絵に少しも變らず寫すべし。日限十日が其間人質として千王丸。獄屋に繫ぎ置き給ふ。事無う絵圖だに成就せば。親王戀慕を思し切り千王丸も御免あり。夫婦に下し給はるべし書現す事叶はずば。夫も罪し其方を召仕へとある勅諚なり。汝も世に知る絵の名入仕果せてあるならば。夫婦が仲も變りなく第一には親王の。惡名出さぬ無二の忠義。急いで勅答申すべし フシいかに〳〵と勸めける。雪姫はつく〴〵と聞くに思ひの結は

れし。糸繰り出す涙の露貫き止めぬ顔を上げ。思召しても御覽あれ名高き畫工の人々さへ。小町が顔に劣らずと寫し得難きあらましを。拙き筆にいかなれば十日が内はさて置いて。我黑髪は白妙の老になる迄案じても。見ぬ俤を中々に。何とて畫き出すべき。と云うて背かば忽ちに夫は殺され此身をば。宮女の數に召されんとは無體至極の勅。十善天子は下々を惠み給ふと聞くものを。此難題は胴慾や。頼もしげなき世の中としやくり。上げてぞ泣き居たる。見るに憂目をますらをが彌猛心の千主も。齒を喰ひしばり眼を張り。ハア力なき次第かな。樊噲項羽と戰ふとも勇氣弛まぬ勢ひも。綸言といふ兵にはほうど矢先を折られたり。無念にあらう雪姫貞節は身に逼る。其上及ばぬ難題も我に連添ふ故なりと。思へば不便の女房と打萎れたる有様は。猛きに餘り哀れなり。詞織部言葉を正しくし未練なり千王丸。雪姫も又腑甲斐ない。地知らずや松浦小夜姫が夫を慕うて石となり。又藤原の佐國は花を愛して蝶と化し惠心僧都は肉身の胸に蓮華を生ぜしも。一心の念願力知らぬ天竺見ぬ唐。工夫の上に歴然たり是を悟つて末代迄。譽を殘す氣はないか。何と〳〵とたゝみ掛け理せめて冒ひ立つる。雪姫はつと打頷き歎きに心奪はれて。清き誠を忘れたり世界の人の子を生むにも。初めの程は其形定かに何と定めぬども。辛抱よりして悉く續き備はる血筋の繪本。此理を種として小町に變らぬ美人をば。寫し出さであるべきか氣遣ひあるな我夫と。今迄萎む面差は。やがて笑顔に返り花。直ぐに小町が姿繪と思ふばかりに美しき。千王大きに悅んでヲ、出來したり頼もしお主が筆の働きで朝敵の名は殘りなく。繪の具の下に立隱れ忠義の道に歸らんと。勇み進んで立上れば師國時夜叉聲聲に。詞コレ召人めに繩を打て。地逃すなやるなと下知を受け取つた〳〵と駈寄つたり。詞千王眼に角を立て。コリヤ蛆蟲ども何をする。坊主が肘手は恐くない。勅諚故に立歸れば逃げも走りもせぬ男。窮屈な目は身が嫌ひだ。へろ〳〵繩の千筋より千王が一言は。地八重の鎖も同然跡へさがつて供せいと反打掛けてのつかのかイザ〳〵お先へ舅殿。女房どもも來い來いと手を引き袖引き引き連るゝ。一挺の弓二挺掛墨と硯の戀仲は。眞實眞書極彩色。織部が情の本繪より。唐繪に稀なる日の本の昔に照らす玉造。小町が姿寫繪と普く。世上に廣まれり。

第三

地水は人に近うして而も人を溺らせ。德

は馴れ易うして而も親み難しとかや。元より無道の蟠海僧都天位を輕しめ逆威を振ひ西嵯峨の別院を內裏造に建て並べ。身の天罰を顧ぬ冠の下の髻鬘。法衣を解いて袞龍の袂けやけく玉扆に着き。自ら天子と稱ずれば。從ふ所の惡僧迄。假髮頭とり〳〵に。おのれと登り官加階。護摩堂守の關白職。お札配りの左大臣。奉加勸めの權中將。旦那あしらひ頭の辨。お福所の尙侍。常香守は衞士の役。伴の御奴朝淨め。鐘撞き坊が御垣守。其役役を請取りて。木地が丸さに冠を。滑らかすやら束帶の。裙を踏まへて轉ぶやら。笏で頤搖磨潟。船に醉うたる風情にて騷々しくぞ。列座する。蟠海緩と空嘯き。げに幸ひは招くに來る。巍蕩々たる禁裡の體粧。追付け大望成就を待ち設けたる前表と。食慾先立つ廣言は こをましくも愉てなり。時夜叉席を抽んでて。君には何時迄うかうかと時節を見合せ御油斷ある。衆徒野武士等を始とし數千騎擧つて合戰を。今や今やと待つ所。急いで京都へ御出陣然るべうとぞ勸めける。ホ、ウそれこそ彌猛に思へども。小氣味惡きは千王丸彼奴を殺さんばつかりに。かの高雄での仕組より段々枕を割り續け。どうやら斯うやら只今で牢獄の身となしたれども。未だ命のある內にすはと言はゞ出しやばつて。又慘い目に出遇はんかと思ひ出すさへぞつとする。先づ〳〵彼めを殺すの計略仕上を見よと云ふ所へ。師國はことぐ〵しき競ひも顏に乘物を。桐油にしたみ細引掛け下部に舁かせ殿中の。小暗き處におろし据ゑ。御大切の召の者首尾よく伴ひ候と。聞くより蟠海。ヲ、大儀大儀。早々是へ引出せ承ると立ちかゝり。駕の縛め切りほどき罷り出でよと戶を叩けば。あいと答へて立出る。男の年は三十の上は二三度水淺黃。木綿袷のしよぼからげ彥惣頭巾の髻先に。早や職人と知られける。邊を見廻しぎよつとして。あなたへ走りこなたへ行き。立騷ぎ橫手を打ち。面妖な處へ來た。わけも云はずに道中で乘物へ拾ひ込み。はつと思うた其後は闇路を辿ると覺えしが。悲しやおれは死んだげな。あれ〳〵あそこに閻魔樣御慈悲でござる十王樣。婆へ歸して下さりませ。老いたる母や女房がわしが手一つまぶるとは。言はずと見る目嗅ぐ鼻のお取合せもあらう筈。參らで叶はぬ道ならば衣裳の仕覺もあるべきに。頭巾を着たる罪人は。ためし稀なる我身やと 震ひ佗ぶるぞ可笑しけれ。師國も打笑ひ。成程合點の行かぬ筈。忝くも爰は禁中。あれに御座るは富仁親王。汝を御殿へ召さるゝ事世間の聞えを憚る

故。斯く計ひて連來れり。少しも恐るゝ事はない。宣旨の趣とつくりと呑込ませいと云ひければ。ハア扨は爰が内裏樣 地 結構なやら恐いやら未だ性根は落着かねど。お内裏樣のお手づから煎じ茶を呑むなどとは。凡慮の外の仕合せ。とてもの事に十粒程供御でも浮し給はれと。フシ頭巾を取つて畏る。地 蟠海逸に聲をかけ。詞 ム、人形作の名人。左の甚五郎とは汝よな。最前よりも樣々と痴をつくすは作物。以前は由ある武士の由。魂を見屆けて大切の所望あり。一通りを語るべし。世の噂にも聞きつらん。朕雪姫が姿繪に戀慕の思ひ遣瀬なく。后に立てんと計れども千王といふ夫が邪魔。彼奴を害せん其爲に。難題を言掛けしは。高野大師の御筆に小野の小町が姿繪を。末世の鑑に殘されしは寶藏に納りて。天下に一人も見知らぬ圖。それに變らず寫すべし十日を限りて出來ずんば。雪姫を召上げ千王を誅せんと。のつぴきさせぬ魂膽よも書くべきとは思はねども 地 一器量ある女繪師。自然に寫し得る時は我戀叶はぬのみならず。天下の人の物笑ひ細工に於いては汝また。世に知られたる者なれば七日が内に先達つて件の形を刻み出し。雪姫に鼻あかせば朕が望みも叶ふと云ひ。汝も細工の名を擧ぐる褒美は望みに任せんと。フシ誠しやかに語らへば。地 甚五郎思はずも二度びつくりの身の難儀。生れ付いたる正直者なか〳〵不義には傾かじ。何卒此場を言逃れ首尾よう宿に歸らんと。騷げる胸を押鎭め。詞 職人連を公へ召出さるゝ有難さ。冥加の程も辨へず勅諚違背致す段。畏れ多く候へども。甚五郎めが細工の儀は師匠も取らず教へもなし。地 美人に三十二相とは音には聞けど目には見ず。滅法界の當仕舞子供の泣くを紛らはす。慰む業に候へば。權者の筆の意氣込を。千日千夜寫すとも叶ふべき儀にあらざれば。詞 御赦免願ひ候と謹んで平伏す。蟠海大きに怒をなし。ヤア表裏ある拔け口。京童に至る迄細工は左の甚五郎。繪師には狩野の雪姫と互角に立ちし名の譽。彼めは繪圖を請合に。おのれは辭退致す事朕が詞を侮るのか。雪姫夫婦を疵ふのか。所存を聞かんと迫りつくる。甚五郎頭を上げ。御不審は御尤も。小町が誠の顏形我が知らねば雪姫も。見ぬ事ながら靈かんと領掌せしは貞女の道。十日を限る夫の命金輪際迄助けんと。思ひ込んだる一念こそ天理に通ずる工夫の柱。地 是を基に取付けば小町はおろか目に見えぬ。金命鳥でも寫すべし。甚五郎が身に於いては工夫の柱候はず。其上一人の老いたる母三日以前に何者か。勾引されて行方なく洛中洛外夜晝

と。足を空に尋ぬれば魂は早や有頂天。鉋取る手も覺えずと聞くより蟠海聲を上げ。ヲヽ面白い〳〵。地急いで召人引出せ承ると一間より。頭の雪も溶けやらぬ繩目より猶見る目憂き老の〻足取フシ弱々と。やれ甚五郎母人か是は〳〵と打驚き走り寄らんとする所を。師國其外惡黨ども眞中に駈け塞がり。詞推參至極の下郎め。大事の宣旨を蒙りて勅答もせずのさ〳〵と。召人に立寄らば目に物見せんと極附くる。甚五郎氣色を變へ。こは心得ぬ人々かな。老いたる母にいか程の罪科ありて其如く。縛り絡げて置き給ふ。君邪にましまさば諫を云ふべき方が。共々跳り狂はるゝは君臣共に世は既に。地道なき國となりしよな。あはれ昔の武士ならば天子であらうがお公卿でも。片端より斬散らし母の供して歸らうに。町人の身の悲しさは小刀一本貯へず。右の腕は叶はねば心ばかりの羽拔鳥。無念の我や口惜しと。慮外も身をも顧ず。フシ罵りわめくぞ道理なる。地色蟠海はしたり顏。詞ホヽ、嘸あらん〳〵。兼々親に孝なる由先だつて召取り置く。是を汝が工夫の柱。なんと違背はなるまいが。返答いかにと迫り付けられ。地甚五郎一言の答も出ず胸輻り。道を歪めぬ墨曲尺も鬼や角狂ふ有樣に。かしこへどうど居坐つてスエテ身悶へ。したるばかりなり。母も涙にくれながら。ヲヽ、道理やなことわりや。地因幡藥師へ參詣し。その歸るさを大勢に取圍まれて今日三日。憂目に遇へる此身より夫婦の人が泣き焦れ。尋ね惑はんいとしさに命の内に今一度。顏をも見せて死に度いと願ひし神の利生にて。思はぬ對面遂げたれば。フシ此世に心は殘らぬぞや。地色只今聞けば自らが召し取られしは其方を。賴まん爲の下心世に大切の詔。輕々しくも請合うて折角作り刻んでも。お氣に合はねば身の恥辱。お役に立てば雪姫が貞女の道を妨げん。人の歎を身につみて未練を出すな甚五郎。親子の因夫婦の義理いづれも重き事ながら。他人の誹が恥しい若木の末を枯らすなよ。はや流れ行く老波の母をいとふな庇ふなと。言葉を盡くし氣を配りフシしやくり。上げてぞ泣き居たる。地色途方涙の甚五郎やう〳〵と頭振り上げ。今に始めぬ親の慈悲。憂目の中におはしても。子を思うての御教訓。あら勿體なや忝なや。左程恩愛深き程猶天罰が恐しい。詞いかに貧苦を致せばとて。夫婦が代る〳〵にもお供に添うて歩きなば。地斯樣な事はあるまいと女房どもがぐどぐどと。悔みては泣き云うては泣き。泣くを見兼ねて相借家。お町衆迄手分してわしは今日稻荷山。深草邊を尋ねしにあの

侍に出逢へばこそ。存じも寄らぬ御對面いまだ盡きざる親子の緣。差當つたる御難儀を救ふより外世の中に。義理も道理も無益ぞと。思案極めし顏色に母はいよいよ氣をせいて。詞ヤレ狼狽者卑怯者。おぬし今こそ町人なれ。先祖の武士の名を汚すは。地不孝の上の不孝ぞと。母は子故に身を捨つれば子は又母を痛りて。誠にせまる憂き涙。ふし心の玉を貫けり。地色蟠海焦つて大音上げ。詞よしなき憂に事延引母が生死はおのれ次第。孝を立つるか義を守るか。ぬかせ〳〵とのゝめけば。地思ひ詰めたる甚五郎。詞ハア畏り奉る。常々親を養ふも此左の手只一つ。地色今又命を助くるも此手に得たる細工の道。孝行のため君のため念力を以て七日が内。刻み申さで有るべきかと。ふし さも潔く云ひ放す。詞イヤ〳〵何とも呑込まぬ。當座の難を遁れんとは面魂に顯れたり。僞りならぬ誓を立て。コハ曲もなき御詞。甚五郎めも其以前武士商賣をせし時は。不義非道には傾かねど今町人となつたれば。仁義禮智の四つ實は拂ひ仕舞うてさつぱりと。地新銀實の細工人小刀冥利此方に。少しも僞り候はぬが疑はしきは御方々。詞内裡々々と宣へども來りし道を覺えねば。重ねて母を受取りに地いづくを指して參るべき。證據をたべと望みける。地色蟠海暫く思案して。地裝束一重召し出し下々なれども晴にも。天子の服は聞き及ばん。詞是を後日の證にせよ。今日より七日に相當らば勅使を母に相添へて。地汝が宿に送らんとさもありさうに欺罔れば。甚五郎立寄りて見れば袞龍天子の御衣。ハツトばかりに押戴き玉の御階の案内も。知らぬ下郎の冥加なく鬼角疑ひかけまくも。忝しや勅諚を何しに背き申さんと。巧にふはと乘物を。包む桐油の神ならぬ身の行。方こそ三重へ果なけれ。返せや〳〵お祖母をかやせ。甚五郎をかやせ。ふしかやせ〳〵の。地色太鼓鉦。尋ぬる妻の心さへ。闇に礫の當所なき行方を照す小提灯。骨惜みなき相借家頼めばほんの杖柱棒になる迄足限り歩けどあるか白雪の。逢はで今宵も明方に。ふし打連れ我家に歸りけり。地色涙ながらに女房はマア〳〵皆樣忝ない。夜の明くる迄うと〳〵と駈廻つての御懇切。其甲斐もなき悲しさと。スエテ袂絞れば聲々に。詞ヲ、道理々々。祖母樣といひ甚五郎。地二人ながら見えぬとは並大抵では泣き足るまい。こちとに禮は及ばぬ事懇仲はこんな時。とても尋ねに出るからは一人も二人も同じ事。隨分探し歩くのに逢はぬはどこへ摑んで往た。大江山の鬼神でもお祖母に無心は云はぬ筈。年寄來いといふ程に鳩の峰へも飛ばれたる。甚

五郎はてつきりと源五郎狐へ入婿。大和の方を尋ねたら（フシ）知れるであらうと笑ひける。（地）女房は餘所事の耳へ入らねど愛想げに。お宿の店の開く迄は皆寄つてたばこでも。茶でも參つて下さんせ。（詞）サレバノ。亭主の留守に大勢の。頭數を押込んでお茶爭ふではなけれども。（地）志ちや參らうと皆門口に來かゝりしが。ヤア何やらあるぞ提灯と。立寄り見れば是はさて絡み付けた捨乘物。合點が行かぬと詞の下。（詞）こりや女房ども。湯でも水でも一口と。（地）聲は紛はぬ甚五郎。ヤレ戻つたはそれ〳〵と手ん手に細引ひつたくり。桐油捲ればすつと出る冠。裝束きらめきて。見た事もない身の有樣女房初め皆の者。ためつすがめつ打ちまもり。甚五郎には極つた形が一圓呑込まぬ。樣子はどうぢや昨夜から（フシ）どこに居たぞと咎むれば。（地）さあらぬ顏にえせ笑ひ。（詞）ナントきついか〳〵。羨しうてたまるまい。ちつと吹聽仕ろ。さる所の神主に祭道具の貸賃。壹貫五百ねぐさになり何時でも留守を使ふ故。昨日は時分考へて案内なしに濕所へ。ずつと這入れば幸ひと夫婦酒事最中の。眞中へのし上り。人には損をかけながら。こりや御榮耀でござるのと。憎體口に當付けられ。（地）そこらが流石長袖ぢや。赤面してそつと立ち算笥の中から此裝束。前に置いて手をつかへ。（詞）銀子と云うては當分ない代りに是をと聞くと早や。（地）變改のない内に取つて着して思ふやう。先づ此形で二三日店先へ出て雛の看板。それから跡を切り碎けば芥子人形が六七千。十層倍の利德ぞと飛付く心をじつと鎭め弛をくれぬだり聲。（詞）神職の身を以て尾籠至極のなされ方。神は非禮を受け給はずなりませぬなりませぬ。（地）ならぬ〳〵と一越調そこら四五軒鳴響けば。筋向の醫者坊が。藥研片手に走つて來て。どうぞ了簡遊ばせと詫びればいとゞ目垂れ見て。こなたの知つた事ぢやない醫者坊叶はぬ退いて居や。いかにも構はぬ筈なれども。扱ひかかつて身どもゝ亦。すご〳〵とは歸られぬ是非に及ばぬ古けれど。乘物一挺はずみましよそれで足らずば桐油細引。平にと云ふを機にして近頃無念に存ずれども。こなたに免じて堪忍と云ふより早く三枚肩。飛ぶが如くに立歸り（フシ）斯くの通りと紛らかす。（地）皆々横手を丁と打ち案じたとは格別。銀儲して送られて。身上は吹付くる左扇の甚五郎。祖母樣は御輿で戻らりよと（オクリ）さはめきへてこそ歸りけれ。（地）夫婦も今は背戸門を開けてもあけぬ胸の內。裝束ながら甚五郎物をも言はず煙草盆。思ひ草とや手に觸るゝ煙管より猶廻り氣な。女房膝を突き動か

し。詞これ爰な野良間。何時の頃から目を抜いて内裏上臈とくさり合ひ。公家出立での夜泊 地いかいお手柄さるにても。母御様の此頃中行方知れぬは忘れてか。わしが心の悲しさをいかばかりとか思うてぞ。姑御にも此方にもお氣に違うた事もなう。睦じう暮せしに行方の知れぬは何程の。恨み憎みのある故と身を疑へば世間には。胴慾者と謳はれん生きて詮なき身の上と。わしや覺悟して居ますぞや。それとは違ひ結構なぞ〳〵としたる形をして。相借家の人々へも苦勞の禮はそこそこに。嚔八百は何事ぞエ、胴慾や怨めしと スエナ たくり掛けてぞ。かこちける。地色甚五郎小弊になり思ひがけなきなり形。心得難く思ふ筈我身ながら我かとも。辨へ難き身の難儀。詞藤の森の邊にて人大勢に立圍まれ。禁中へ召されしに母人は早やあの方に。人質に縛められ仔細は斯様〳〵にて。詮ずる所見ず知らぬ小町が像を七日が内。仕果すれば其通りさもなき時は親と子の。長き別れとなる事を。地そも何とせん女房と思案顏なる目の中に。スエナ 忍び涙を浮べける。地色女房聞いて打驚きさうとも知らでつか〳〵と。フシ今の慮外は免してたべ。扨おいとしや姑御。老木の肌へ荒けなき縄目に憂きを見給ふと。傳へ聞くさへ堪へ難き。詞いまだ目に見ぬ鳥類さへ作り出せる名人の。細工を得たる御身にてなど腑甲斐なく見え給ふ。地片時も早くお命を助くる樣子遊ばせと。勸め立つれば甚五郎。誠にそれよ能う云うた。油斷をするは不孝ぞと冠裝束脱ぎ置きて。木地の頭の荒ごなし左細工に工夫の妙。先づ口開に目は二つ鼻筋高う耳の穴。なしとは人の偽か。淨瑠璃本の小町でも大方格は知れてある。サア女房ども美しいか。フシ評判せいと差出すを。地色見るよりふつと笑ひ出し。詞どこにか小町が目を剝いて澁面作つて居やすまい。おぬしが目にもさう見ゆるか。地どりや此度は念入れて白木にあてる青木賊。磨かれ出づる玉造。小町が姿生寫し。ぞつとする程よかろがな。詞ヲ、ぞつとする〳〵。矢張初めの澁面顏。餘り立派で嘘凄い。こなたの細工何時からかどの入形も此顏癖。地色よう氣を付けて見給へと詞に付きて打守り。初めて刻む其時の。一念が晴れぬ故側から指南頼むぞと。互に心合せ砥に。小刀の刃もつく〳〵と。切れると繋ぐ親子の縁 オクリ 案じ へ煩ふばかりなり。フシ物憂き旅も。一入に重きが上の稚子を背中に。ぢつと笈摺や。胸に木札の巡禮歌。メエナ女の聲のしなやかに 巡禮歌 補陀落や岸打つ。波は三熊野の。那智のお山に。響く瀧津瀨通らしやれ。歌父母の恵みも。深き詞

これ〳〵ナウ。こちらに大事の魂膽事。地氣が散れば邪魔になる通つて下され通らしやれ。歌岩を立て水を。湛へて壺坂の。詞ヤイ物貰ひ。斷り云ふを聞かぬ顏貧物見世にへちまふは袂の下の谷波へ人形を納めよといふ事か。地うろついて居りや巡禮に棒喰はすと腹立つる。詞ハア御尤もさりながら。報謝の望で先にから立ち休らふには候はず。私どもは遠國者思ふ願ひの候て。西國の志し何とも難儀は此若が。道中から蟲おこり泣き惱むを賺し兼ね。地氣慰に人形が求めたさと聞くより早や。手鑿返す商ひ口。詞ム、結構な巡禮樣。若子は奇麗な生れつき。お顏なら手足ならいかい上手が作つた物。地色女房どもと談合してお氣に入つたを召しませ。醫者になりたか胴人形飛脚が好きなら飛び人形。南京人形武者人形お望み次第と言ひ立つる。地巡禮が子を下し。詞コレ金平か西行か。地どれかこれかと宛てがへど其方へ目もやらず。今作り居る人形の顏をつれ〳〵守り居て。あれを〳〵と指差せば甚五郎可笑しが作り居る人形の顏をつれ〳〵守り居て。詞世智賢い幼い身がきゞりし人形より。地荒木作りが欲しいとは錢安いのを御賞翫。商ひはしたけれど大切な誂物。ッシならぬであンすと欺けば。地色巡禮も恥かしげに。いかさま此子も不物好。此内で見てどれなりと買やと云へども聞入れず。詞イヤ〳〵あれが父樣の顏によう似た懷かしい地買うて〳〵と泣叫ぶ。母は聞くさへ慕はしく心を付けて差覗けば。げにも夫に生寫し縱から詠め横から見て。そゞろに頭を抱き取り我子引寄せ涙にくれ。ヲ、賢い子やよう見知つた。日頃に可愛がられたる恩愛によりとゝ樣の。逢ひにござつた對面しや。アラ懷かしの我夫と ッシ抱き。付いてぞ泣き居たる。地色夫婦は呆れきよろ〳〵とためらひしが立寄つて。詞ナウ巡禮。忝くも此人形は天子のお手に觸れらるゝ。地涙に穢すは何事ともぎ放す手をしつかと取り。アラ心なの都人。夫の形見と見るからに共に此身も朽つるとも。なか〳〵頭は渡さじと奪取りて走り退き。撫でつ摩つつ抱きかゝへ。懷へ入れ膝に置き。袂の内に押隱し身を震はせし氣息ざしは。海士の浮糧引上げて ッシ玉取り得たる如くなり。地色女房は立寄りて。詞殿御を慕ふ御歎き穗に現はれて痛はしや。此人形は手前にも命に代へる念願にて。夫が刻みかけたれども仔細に依つて自らが。貰うてなりとも參らせん樣子ありげな御有樣。地心置かずとお咄しあれ數ならねども。我々が。一遍の回向の種功德ともなるべしと。スエテ世に泌み〳〵と尋ぬれば。地色旅の女は起き直り嬉しの今の詞やな。女心

のはかなくも。切なる愁を包み兼ね。取亂したる身の上を語り申さん聞いてたべ。詞我が生國は肥後の熊本。夫は度會源五とて。關白公に仕へしが不慮の事にて浪人し。伯母を便に國許へ下り給ふを幸ひに。從兄弟同志の夫婦となり八九年添ふ内に。子といふ者は是一人。かねがね源五心底に古主へ歸參の望みにて。此子を我に預け置き三年以前の春よりも。京都に上りゐられしが。六月廿二日の夜祇園林のほとりにて。闇討に遇はれし由。地傳へ聞いたる其時の。口惜しさ悲しさを推し量りても知ろし召せ。生死無常と云ひながら病み煩ひにもある事か。男盛をむざ〳〵と旅の空なる露と消え。詞此子はやう〳〵其時六つ。後立にも助太刀にも。我身の外に知るべもなくましてや顔も名も知らぬ敵を狙ふは。もろこしの吉野の山に入る人を。地尋ぬるよりも果なしと思ひながらも念力と。佛の誓ひを頼みにて形は斯樣に出で立つとも。心は矢張り煩惱の。絆も解けず寢れば夢。歩けど思ひ忘られぬ。夫の最期は三十八。目の張眉のかゝりより。面長にきつとして。只其儘の顏形斯く迄似れば似るものか。正しく是は觀音の。御手を貸して御亭主の作り給ふと思ふから。暫しも肌は離されず。買はせてたべとばかりにて フシ聲を。ばかりに泣き口說く。地色同じ涙に女房もげに定めなき世の中は。いつ何時か身の上にかゝる憂目のあるべきと。フシ思ひやるさへあぢきなや。地色夫婦連添ふ仲にさへ女はいとゞ氣の狹く。世間を耻ぢて物事を案じて暮すものなるを。殊更殿御に別れての旅は物かは大切な。敵に憂身窶さるゝ姿といひ。心といひ世界の女の鑑ぞと。フシ思ひ入つてぞ感じける。地色甚五郎は默然と始終を聞いて居たりしが。頻に儘す落涙を押拭ひ〳〵。又類なき志。承るも人形故亡き世の人に似たるこそ幸ひ。何かは惜み申すべき頭ばかりも見苦しき。それ〳〵と云ひければ女房も嬉しげに。よくこそ心付けられしそこらはわしが細工ぞと胴串衣裳裾辻のあふ瀨に返る其人と。梅華皮取りて差さすれば。詞ア、イヤ〳〵。假初ならぬ武士の姿。地長持にある本身の大小。暫くの中取つて來い。アイと答へて一間に入りオクリやがて〈二腰フシ持ち出づる。地色甚五郎取上げ人形に横たへさせ。旅の女中御覽あれ。詞此姿ではどうぢや〳〵親子は見るよりつつと寄り。地とゝ樣物を云はしやれと又泣き出せば母親は。氣も魂も消えて行く。煙の後も面差は生ける如くありながら。など詞を掛け給はぬ。せめては妻か我子かと。たつた一言聞かせてと天に。あこがれ地に伏して又

歎き添ふ氣色なり。詞甚五郎聲荒く。歎きに性根晴まされ未練なる女かな。大小が武士の魂其二腰より物を云ふとつくりと念入れて對面あれと辱められ。地よくよく見れば鍔は木爪青皮の緣。目貫は金の狂ひ獅子不思議や夫の差物に。似たりや似たり花菖蒲菖蒲作りの梅華皮鞘。此二腰は何として此方の手には入りたるぞ。詞ヲ、問ふ迄もなしお主が夫。庚會源五を討つたる敵。昔は勝山彦次郎サア首討てと地聞くより早や。扨は夫の敵かと。子を引抱へ走り退き杖に仕込みし刀を差し。氣色凛々しく立寄れば。甚五郎妻も人形に差させし刀追取つて。夫を圍うて立つたるは フシ危くも亦健氣なり。詞甚五郎聲をかけア、せくまい〳〵覺悟の前。地浮世に報といふものはあるかないかと疑ひしに。我身にひつしと知られたる。懺悔を兩人よつく聞け。鼠窮して猫を嚙み。人貧しうして盗みすと。云ひしは手前の身の上。親の知行を棒に振り母と女房引連れて。花の都は住吉と此所に借宅し。晝夜渡世を稼ぐ内因果は老母大病受け。何れの醫者の配劑も人參目五分七分づゝ。刀脇差諸色迄賣代なしても續かばこそ。一人の親を見殺すかと悲しい時の神たゝき。佛もせぶる思案にて清水へ詣でしに。詞八坂の茶屋より呼掛くるは正しく庚會源五が聲。同じ浪人仲間にて懇意に語る仲なるに。地心浮かねど立寄れば。家内の宿女に取廻され。潛上らしう紙入より四五十兩の金子を出し。湯水の如く蒔き散らす。扨は歸參が叶うたか珍重の儀と云ひければ。詞いや〳〵是には仔細あり。話は追つて と言ひ殘す。地ア、よい物を持つてをる十兩貸してくれたらば。母の命を助くるにと。金に惚れたるなずみよりふつと付いたる無分別。所詮殺して取りたりとも孝行よりの悪心は。天道見許し給はんと勝手づくなる了簡して。とも〳〵飲んづ歌うつに夏の夜早く更け行けば。深々たる鐘の音。一つ二つと指を折る數も積つて丑三頃。いざ歸らんと打連立ち眞葛原の跡先に人通りなき間を見合せ拔打ちにちやうど斬る。南無三寶と振返るを疊掛けて斬付くれば。刀持つ手にしつかと喰ひ付き振れど捩ぢれど放さぬを。漸うとして踏倒し止を差して立歸り。金子の蔭にて早速に母の病氣は治りしが。喰付かれたる右の腕。次第に痺れ叶はねども。詞左で細工の妙を得て異名を左の甚五郎と。日本國へ廣まる故。身上不足な事もなく。地世を安樂に暮すに就け不便な事を致せしと。一念思ふ其日より。最期の顏が向ふに立ち。お山作るも源五に似る。若衆刻めど源五に似る。あら凄じやと思

思へども母にも妻にも隱せしが。詞今月今日兩人が爰に來るを待受けて。我心命を果すよな。誠に自業自得果と。己れを觀ずる覺悟の體フシゆゝしくも。又優しけれ。地色親子は一度に擘をかけ。詞其方に討たれたる。度會源五が妻にまさご同じく一子德太郎。サア立上れと駈寄るを。地女房あはて押隔て。大事の敵を目の前に。何とて見許し給ふべき。詞さは云へ義理と恩あれば討たれぬ品もある事ぞや。地行方も知らぬ旅人が夫の顏に似たるとて。立寄り給ふは人形の恩。これ正眞の人形にも。フシ義理とは誰も申すぞや。地色樣子を問ひしは我身の恩。敵と名乘るは夫の義理。恩と義理ある身の上に。詞君より離題七日が內に。小町の像作り出さぬものならば。地母が命を召されんとて內裏に止め置き給ふ。爰の所を聞き屆け。僅七日が其間。命を預け給はれとフシ手を合は。せてぞ。泣き口說く。地色まさごは急いて身を震はし御道理なりさりながら。我身になりても御覽あれ。詞敵の面は知らずとも。おのれやれ一念で尋ね逢はんと方々を。足掛三年さまよひて。地言問ふ人も嵐吹く山のあなたを故郷の。空懷かしく折々は。父母の御身の上いかゞ渡らせ給ふぞと。思ふもよしや我夫の。敵を討たぬ其內は。二度國へは歸らじと迷ひ〳〵てやう〳〵に。今日といふ今巡り合ひ餘所に看なして謂れなき。フシ御身に義理を立つべきか。地色サア甚五郎遁さぬと刀をすらりと拔き放せば。させぬと女房縋り付く。振切れば又後より抱き付いて引戻し。しがみ付きに。詞君より離題七日が內に。小町の像作り出さぬものならば。地母が命を召されんとて內裏に止め置き給ふ。爰の所を聞き屆け。僅七日が其間。命を預け給は轉び臥し互に。夫を思ひの山劍の山を登り兼ね。フシ倒れさまよふ如くなり。詞甚五郎目を怒らし。卑怯の振舞何事ぞ放して討たせと睨め付くる。女房は怨めしげに心得難き詞やな。他人へ義理を立つるのは姑御への命の仇。親孝行の爲ならば逃ぐるが恥でも引でもない。地此場を我に振り任せ立退き給へ我夫と。尙もまさごに取付いてフシ早う〳〵とせき狂ふ。詞ヲ、尤なり某も。心付かぬにあらねども母の命を今日迄。助けし事も源五が恩。地末期の念力三年の月日と共に小刀の先を巡つて妨ぐれば。とても小町が形をば。作り得ることなり難し。親子の定命只今に逼り切つたる身を持ちて。いづくへ足を向くべきと フシ動く氣色は見えざりけり。地女房今は諌め兼ね。ア、腑甲斐なのお心や。死人に念力ありとて。親を助くる念力を。いかでか妨げ申すべき。お二人樣に成り代り我こそ死なん身の上を。まさご殿にも聞いてたべ。詞元私は播磨潟室の遊女に候ふが。あれなる人に思はれて當番非番の別なく。通ひ續

けの過りにて浪人なされ候へども。お袋様の納戸金三百兩に請けられて。地借家住居の憂き節も自ら故の事なるぞや。昔の武士にてましまさば細工の雛儀もかゝるまじ。三百兩の金あらば夫の惡心起るまじ。源五を殺せし根本の。敵といふ此身なり。夫の代りに自らを。討つて思ひを晴らしてたべ。フシ聞分け。給へと口説き立てむせ返り。てぞ歎きける。地色まさごも共に涙にくれ。ナウ歎きも同じ歎き。憂目も變らぬ憂目ぞや。母故沈む身の懺悔。男思ひの物語一人を討てば忽ちに。三人殺す罪科は冥途の夫の身に報ひ。修羅の苦患となりやせん。七日の命預けるも謂はゞ暫しの間ぞと。我は了簡致せども。辨へもなき子心に。待遠にかは思はんと。許すもつらし許さぬも。餘りつれなき次第やとフシ差しうつ。むいて居たりける。地色女房は力を得店に飾りし馬の手綱。引きかなぐりて差出し。詞生きては聞を同じうし死しては一つ塚に入る。地身體をお預け申さんと我と後へ手を廻し。フシにつこと笑うて居たりけり。地色まさごも思案付き兼ねて。詞コレ德太郎敵を討つか此人を預り宿へ連行くか。地分別しやと聞くよりはや繩取つてかひがひしく。高手小手に引縛り。詞ヤイ甚五郎。今日の命は助けてやる。七日過ぎたら此女と。代々するぞと呼ばはれば。地見てゐる母も縛らるゝ。女も共に聲上げて。スエテわつと。ばかりに。泣き沈む。地色甚五郎は感涙に身さへ流るゝ心地して。然らば拙者は七日が内一間所に取り籠り。一念力の鑿鉋小町が形を刻みたて。お禮はつど〳〵其時と止めぬは親へ孝行者。引かれて行くは心中者。氣の通り者了簡者さらば。さらばも泣聲に。あら味氣なの世の中と。妹脊の歎き恩愛を墓ふ心の諸翼水の。鴛鴦。巣の燕搦みし姿羽拔鳥泣く〳〵見送り留まりぬ。

第四

フシ月花の。形は筆に寫せども。思ひは繪にも詞にもオクリ及ばで。積る雪姫が。住居は殊に奥深な。本フシ亭の一間に取籠り。地人も通はず寄付けず。長地見もせぬ顏を兎や角と心も空に案じ佗び机に肘を寄るべなく。只つつくりと燈火に照添ふわれが姿さへ憂目に細る心地して。更くるも知らぬ宵の間に。一番鳥の知らすれば。はつとばかりに打驚きスエテつれな今の一聲や。汝も妹脊の諸塒羽交の下に濕め合ふ。玉子の數も五ツ六ツフシ十日に限る我夫の。命をせめる八つの時。明くれば消ゆる露霜の。それよりも猶あだし世に。生れて憂目を見る事は。宿世何たるフシ因果ぞや。詞世界の内に住みと住む

人は戀路を樂みに。まだかた若き始より。地八十の老の後迄も欠障なく添ふもある。手づから織れる布機や裁ち縫ふ業を習ひても。夫一人は養ふに。いかなれば自らは藝に譽は得たれども。明日の命を繋ぎとめ引止められぬ荒駒の。あら口惜しや悲しやと持つたる筆をからりと捨て スエテ絶え入るばかりに。歎きしが。地稍あつて手を合せ。南無。日の本の神佛仰ぎ願ひ奉る。別しては弘法大師。フシ御筆の奇特に。小町の佛影向なさしめ給へやと。一心に祈誓して夢にや見ると手枕に。袖を片敷くとろ〳〵と オクリ暫く〳〵眠り入りにける。フシ同じ思ひと。浮れ來る。地世は人形の牛車巡る左の甚五郎。細工の外に取添へて身を削らるゝ義理と孝七日の命氣息の緒もはや切れかゝる夜半過ぎ。人手まぶりに雪姫が。舘に紛れ忍び入り。地色あなたこなたと駈廻り砌も深き扉より。密かに内を差覗き胸を押へ打頷き。詞アヽ少し落着いた。我より先に寫繪を若し仕果せて上げんかと。地心ならず思ひしに流石名を得し雪姫も。日限今に逼る故物憂き眠りに工夫さへ。疲れ果てたる有樣は。いにしへ小町が帝より。麝賜りて言の葉を。案じ入つたる風情かと思ひ出れば我も亦。人目包みに束帶の。袖を翳して行むは。かの大友の黒主が。歌盜まんと窺ひし フシ姿も斯くこそあるべけれ。地色それは昔の優女是は譽れの女繪師。其數ならぬ甚五郎。二つの道は劣るとも。孝には深き奥の海 フシ白波の名は。立たば立て念力通さで置くべきかと心を配り。身を潜めつく〴〵窺ひ居たりしが。更け行く夜半に何時となく オクリふらり。ふらりとねむの木の フシ繁みに倒れ臥しにけり。現には。見もせぬ雲の上迄も。夢には通ふ雪姫が。魂姿を飛び出づれば。コハリ心較べの甚五郎胸より出る思ひの火。二つの魂空中にあなた。こなたと漂うて照り輝けば ナホス舘の内忽ち變じて百數の。御簾の際々几帳の陰昔を今に フシあり〳〵と。磨き立てたる。玉造小町の榮え衰えを。只身の上に顯せしは不思議に。も。三重また〳〵目覺ましゝ 地いで其頃は天長元年彌生の空麗はしき。淳和の帝の御惠み時めく御代の歌の會。紫宸殿の額の間に和歌三神を勸請し。名香立花綺羅をやり玉座深く見え給へば。左の上座は紀の貫之右は同じく壬生の忠岑 フシ我も。我もと伺候ある。地色中にも大伴の黒主は日頃小町に意趣ありて。自ら望む歌合せ フシ晴がましうぞ聞えける。地せかぬ氣色に差同ふ小野小町は花鳥の。すさみかしこき色々の。其詞さへ心さへ姿はいとゞ日の本に。男日照と輝きて フシ御前にこそ出で給ふ。地色貫

之は判者として一々和歌を吟じ上げ。批判の次第ある中に大伴の黒主。雁に寄する戀といふ題に趣向を取結び。詞思ひ出でゝ戀しき時は初雁の。鳴きて渡ると人は知らずや。地貫之暫し打詠し歌の程を聞ふれば。薪を負へる山人の。花の木蔭を行き歸り休らふ風情と褒められて。面目顏に黑主。肘押張つて居たりしは フシ憎體にこそ見えにけれ。地色小町は尙もしとやかに心の奥の水莖の及ばずながら口ずさみ スエテお恥かしやと差出せば。地色貫之取上げ見給ふに。詞水の邊の草といふ題に心を思ひ寄せ。地讀める歌にはまかなくに何を。種とて浮草の波のうね〳〵生ひ繁るらん。繰返し〳〵吟じ終つて感じ入り。歌の姿はいにしへの衣通姫の類にて。弱きは女の品形自然の德を備へたり。古今の名歌今日の司と判じ定むれば御簾も几帳もざゝめきて フシ覺えずどつとぞ褒め給ふ 地色黑主はつつと出で 詞ヤアいかに小町。古歌を盜んで出すならば誰か勝負に勝たざらん。是御覽ぜよ人人と 地懷中したる萬葉集御前に差上ぐれば。貫之取つて押開きよく〳〵見れば同じ歌同じ題にて入れてある。君を始め公卿の面々 フシ興の。醒めたる次第なり。地色小町は騷ぐ氣色なく萬葉集の古歌は。空に覺えてあるものを可笑しの人の詞やと。書物を取りて繰返し。詞疊新しく候へば洗はせてたべかしと。地思ひ入つてぞ奏すれば。兎も角もとの宣旨を請け黃金の盥にたぶ〳〵と。御手洗川の澄み渡る水を湛へて小町姫。心を籠めて三神の御影に向ひ禮拜し。淸き誠の玉襷しつかと結んで肩に掛け。書物を水にざんぶと入れ押浸し〳〵。君が代を汀の氷溶けぬれば。苔の髭をも洗ふよ。地機布を玉川に晒す生平の何時しかも フシ白玉雪。給の盃は。月の影をや洗ふらん。心を洗ふ。御手洗のほとりに立てる二柱。歌の神にてましませばなき名を洗ひ給へや。住吉の。住吉の岸に。生ふなる松なれや。波に洗はれさら〳〵さつと。根は現れて浮草の。文字は殘らず消え果てゝ フシ元の如くになりにけり。地色帝を始め月卿雲客。あつとばかりに感嘆あり是を傳へて世の中の。小町が草紙洗ひぞと見榮す。夢はへ消えて行く 女夫フシ色は日の出よ。戀ざかり。情の雲と名に照りし。スエテ小町は玉の實生えにて。柳の腰も。フシ弱々と。歌も上手で氣も上手。生けつ殺しつ品物に 小オクリ惚れて〳〵思ひを深草の其主樣と相惚れも。心較べの强弓は。弛みかゝりし下紐の。寢衣姿やほら〳〵と。フシ外面を覗き見給へば。ワキ地色痛はしや少將は百夜の數を遂へずし。月にも行き闇にも行く雨の夜も風の夜も。スエテまして霜雪嵐

の夜も行きては車に刻を付け。フシ通ふ給ふぞ哀れなる。大夫地色小町見る目も痛はしく。御側に立寄りて數ならぬ身を斯く迄に。慕ひ給うて夜な〳〵に御通ひこそ嬉しけれ。日數の滿ちし折節は冷え返りたる御肌を。懐で溫め歸さんと。フシ笑顔に玉ぞ零れける。ワキ地色アヽ添なやさりながら百夜を通ふ其間には。魂は早や冥途の鬼焦れし甲斐も何あらん彼の錦木の千束迄待ち忍ぶのは昔の事。今の浮世は氣短く。神佛への立願に百度。參りと申すにも。門前よりも行き歸り其數をだに滿てぬれば。フシ神も納受あるとかや。地色それに習うて少將もあれなる車のほとりより。扉の下迄行き通ひ百夜の數に都合せば。今宵を過ぎぬ御情フシ頼み。入るとぞ搔き口説く。大夫地小町もさすが。誘ふ水。浮れ心に打笑みて實に耳寄りな御談合。誓ひし數だに合ふならば百夜も一夜も變らねど。雨雪霜の厭ひなき心の奥の知れ離し。それにも理候ふか。ワキ詞成程それも心得あり。百夜重ぬる心にて姿を變へて參るべし。地今宵は空も晴れたれど君が心のまだ解けぬ。雪に降られて行かうよ。雪に取りても樣々の。薄雪淡雪春の雪。所は名に負ふ伊吹山。スエテ佐野の渡りにあらねども。大和河内は綿の夕暮。アン〳〵溫さうなる腰付よと。ちつと凭れて戯るれば。大夫フシ小町はびんど立退いて。百夜の數を。待兼ねて人は無げなるお詞や。空に知られぬ。雪ならば。仇に散行く花の雪。誠少き人心。スエテ只うか〳〵と積られて。肌の雪の程もなう。とくれば元の水臭き。フシ男はいやゝと。答へける。ワキ地色コレ水臭いとは宜へども。少將程に身を窶し戀慕ふ者あるべきか。大夫詞あるとも〳〵上がある。地昔用明天皇は。玉世の姫を戀ひわびて。いつしか帝位を振捨てゝ山路が草刈笛とて。世の諺になり給ふも。フシ戀故にてはあらざるや。ワキ地色げに誠過つた然らば雨夜に通はんと。車のもとへ立戻れば。大夫小町も今は濡衣。袖打翳し物陰にフシ忍びて。樣子を眺めゐる。ワキ山城の木幡の里に馬はあれどオクリ君を。思へば徒歩跣。さて其姿は簑に笠フシとは云へ何も着もせずには。地雨夜の詮が立ち憎いはてどうがなと立舞ふを。大夫小町はそつと後より上衣を脱いで打掛くれば。ワキ少將はぞつとして。嬉しさを何に喩へんから衣。下行く水の湧き返る。思ひを休め給へやとフシ袂に。縋り泣き佗ぶる。大夫地小町も色に染糸の亂れ心に手を締めて引ハ二上リ歌闇の夜に。鳴かぬ鳥の。聲聞けば。緣がないかと心にかゝる。緣がなければ恨みもないに。添うて見たらば面白さうな。男ぢやと見て。わしから思ひ。結ぶ

絆につい繋がれて。通ひ車は思ひの種かいの。根から厭なら添ふ氣ぢやないに。欺さ。れた ナホスフシ好いた男と袖翳し。二人フシ春は子の日に。引連れて。堇菫公英土筆オクリ摘むてふ〳〵袖も數々に花見戻りの酒機嫌。あの〻ものゝに千早振三井の古寺 フシ鐘はあれど。地色昔に還る聲は聞えず。ワキハア南無三寶東が白んだお百度始めよ。大夫そんならわしも連立ち行かん。ワキ感浮衣の袴搔取りて。〳〵立烏帽子を風折。大夫歌紅裏白裏一つに搔取り。ちよこ〳〵走り ナホス行きては歸り。歸りては行く一遍二遍。三遍五遍。鶏も鳴け鳴け。鐘も鳴れ〳〵嬉しや今は。九十九夜になりたり。あな苦し眩暈や胸苦しやと悲しいて。車の陰に伏すかと見れば。形も忽ち フシ消えてけり。大夫其怨念の取付いて小町は心惚れ〳〵と。是なう〳〵と歎き迷ひ西へ走り東へ行く。狂ひ車のわれかあらぬか行方知れず〻消えて行く。青黛誰か常あらん。膚に凍梨の梨を抱く。廬生が夢の戯れと。賢き人は驚かず。迷へる者は來し方を。ナホスフシ嘉ひ泣くこそ愚なれ。佗びぬれば身をうき。草と浮れにし。それさへ今は。昔にて。小野とは言はじおのづから惜まぬ命長らへて。辛きを止むる關守に。幾百歳をふる姥は。小町が果の名なりとて。笑ふ人目も恥かしく。スエナ面を隠す破れ笠。後に負へる袋には フシ飢を。助くる。菱烏芋。木の實取らんと道のべの。樗の本に立休らひ。五月待つ。花橘の香を嗅げば。昔の人と。詠めしに我は。ハルフシ梢の秋待ちて。ハズミ命を繋ぐ。外なしと。地色杖を上げ拂ひし時。袖に落ち來る栗柿のかつを遲しと待顔に。地むら〳〵ぱつと落來れば小町は人に取らさじと爰に。立寄りかしこに轉び。千歳の坂と視ひしは。老を養ふ母の杖是はまた。篠竹の。〳〵いさゝ村竹かり竹の。杖に木の實も打たれて力なみあなたへよろり。こなたへよろりよろり〳〵よろ〳〵よろと。走りさまよふ身の行方こそ。フシ悲しけれ。ナウ。物賜べの旅人。お錢たべの旅人。歌それがならずば水松樫ねましねの木。大小柑子金柑などでも。ナホス苦しからぬよの。狂ひ戯れかつぱと伏し フシむせ返り。てぞ泣き居たる。詞ハア餘りに苦しく候程に。是なる朽木に腰を掛け暫く休まうずるにて候。ワキ地然る所に向ふより世を雲水の定めなき。旦過の僧の一人旅通り合せて見るよりも。感詞ヤアいかに老女。お事が腰掛けたるは。忝くも佛體色性の卒都婆。そこ立退けとありければ。大夫愚かの仰せ候や。スエナ古き歌にも唱ふれば。佛も我もなかりけり。南無阿彌陀佛の フシギンオクリ聲ばかりして。身佛隔てなき上に文字さ

へ見えぬこの朽木。勿體なしとの心はいかに。ワキ詞イヤ〳〵汝が引歌は至り至れる智識の詞。地又中頃の俳諧句に。擂粉木よ。我も昔は櫻にて。是ぞ凡夫の見解なれ早や〳〵そこを去れよとこそ。大夫ナウ我とても月花と立並んだる顏形。髭に蘭麝を燻らせて。知錦の帷溫かにナホス隙間の風を脈ひしに移りに。ツシけりな徒らに。道のほとりの。埋れ木と。朽ち果てし身は行交ひに。長地袖褄とても引かざればおのづからなる世捨人。佛になどか遠からん。ワキ詞ソレハ世にこそ捨てられたれ。世捨人とは可笑しの詞。地ナウ煩惱菩提は月と影戴く桶の底拔けて。ツシ水溜らねば月も宿らず。迷ふが故に凡夫あり。ワキ地悟の前には佛もなし大夫褒むるは順緣ワキ誹るは逆緣順逆別なき法心法性。大夫既げに本來一物なき時は。ナホス佛も衆生も隔てなしと懇に申せば。ワキ地僧は狂女を禮拜しさらば〳〵。ツシさらばと云ひて立退けば。大夫地小町も今は是迄なりと杖に縋りて。よろ。よろと立別れ行く。袖の涙の關寺や。鸚鵡返しのその一字。苔の衣を清水の。物言ひ交す七小町。七つも過ぎて六つの鐘ツシ夢は。忽ち醒めにける。地色ヒノ雪姫むつくと起上り。軈て墨すり筆を取り亭に勇めば ワキ羅にも。同じ夢見し甚五郎。二人いそ〳〵我が家へ立歸る。手の舞ひ足の踏み所知らぬ業をも孝行とペ ッキ細工は左。大夫繪師は右 二人いづれが重き晴勝負前代未聞後々末代。小町が姿の。手本なるわと世以つて。是を賞翫す。

第五

地地の麗はしきは稻を養ひ君の仁あるは士を養ふと云へり。されば富仁親王は御違例快氣ましまして。朝政怠り給はねば。共に賢佐の功烈しく。關白兼定其外卿相殘りなく。ツシ肅然として伺候あり。地御隨身には膳手織部廳官雜仕に至る迄。威儀をあらせて相詰めしはオクリ由々しくへも亦ツシ晴がまし。地かゝる所へ甚五郎まさご親子を伴ひ。庭上に畏り。詞私儀は人形屋甚五郎と申す者。勅命を蒙りし日限相違仕らず。細工を調へ奉ると小町の像を御階に据ゑ。謹んでこそ言上す。織部は顏を打守り。ヤア推參至極のえせ者。小町の形は雪姫こそ勅諚を承り。夫の命を救はんと思ひを籠めし工夫にさへ。賞き能はぬ姿をば名もなき小刀細工にて。作りしなどとは胡亂なりそこ立去れとぞ罵りける。甚五郎むつとしてイヤ胡亂とは宣へども。繪に賞き又は木に刻むも工夫に二つあるべきか。雪姫夫を悲めば此方は又母の命。地助けん

ための念力故添くも弘法の。御夢想を得し傳授の形毛髪違ひ候はずと フシおめず臆せず云ひ放す。地色兼定立寄り木像取上げ。げにも小町が顔形生けるが如き細工の妙。神妙々々さりながら。詞此儀に於て他の者に宣旨あるべき仔細なし。何者に頼まれし様子を語れと宣へば。甚五郎手を束ね。先月廿五日の夜密かに御殿に召し出され。勅命ありし趣は申すも餘り畏れあり。人質として老母をば内裏に縛め置き給ひ。地即ち後日の證據とて御衣をば下し賜はりぬ。御寛あれと差出す。詞ヤア野太い下郎め。天子よりお頼みとは跡かたもなき僞り。先月廿五日の夜は狛の舞樂を叡覽にて清涼殿に相詰め。終夜外の御沙汰なし。地色其上此御衣汝等が手に入る事。此頼み手は此方に心當の詮議もあり。詞ソレ搦めよと聞くより早や雜人立寄り押伏せて フシ敢なく縄をかけにけり。まさご鬱き差寄りて。詞憚りながら自らは度會源五が妻。是なる者に夫を討たせ此如く附添ひて。今日本望遂げる筈。然るを召捕り給ひては誰を敵と狙ふべき。地甚五郎一命を妾に下し給はれと。スエテ涙を流し言ひければ。詞兼定は聞きも敢ず。其源五めこそ某が以前の家來。こしやく者故有職の道をより〳〵教へしに。地色奥儀を極むる慾心崩し代々傳はる家の秘書。並びに君より拝領の。詞コレ。此御衣を盗み取り。行方知らずなり行きしが。其後聞けば蟠海が謀叛に與し剰さへ。内裏の造營法式迄きやつめが指圖致せし由。扨は御衣をも蟠海に渡せしは必定。地色是ぞ逆心一味の證。妻子とても逃れなししつかと括れと下知あれば。承ると立ちかゝり親子も縄目に及びしは フシ思ひがけなき有様なり。地かゝる所へ雪姫あわたゞしく兼定公の前に出で。小町の繪を差上げ。詞かねて宣旨を請けし姿繪調へ參り候なり。地叡覽に入れ給ひ。片時も早く我夫の。命を助け フシ給はれと思ひ入つてぞ奏しける。地色兼定公つくづくと細工と繪圖を引較べ。詞ヤアをこがましい雪姫。元來汝が寫繪の虚實を糺さん其爲に。勅に從ひ先達て高野山に立越え。弘法大師の眞筆を再三拝し參らせてとつくと記憶してあるが。ハヤ先達て細工の像髪筋程も違はぬ名作。それに同じき形をば遲れて上ぐるは贋物同然。かかる粗忽の仕業より事延引になるくだり。地宸襟を悩まし宣旨を默す重罪安穏にて置くべきか。詞ソレ織部搦め捕れ。畏つて立上り フシ泣く〳〵縄をかけにける。雪姫わつと泣き出し。思ひを碎き身を懲らし夫を墓ふ冥加により。二つともなき繪像をば夢想に大師に授かりしに。誰が先達て上げけるぞ不思議さよ淺まし

や。夫婦が緣も是迄かとかつぱと伏して泣きければ。地甚五郎も堪へかねて雪姫に差向ひ。詞ヲヽ先を越されし殘念の歎きは嘸と思ひやる。何を隱さん其方の工夫を慕ひ館に忍び。窺ひまどろむ其内に夢想に受けたる此細工。地然れば深き妄念の。盜人は某。非道に身命溺れしも。母を助けんためなるに。我さへ死する運なれば。恨みらるゝも恨むるも。共に果なき浮世ぞと。スエテ男泣にぞむせび入る。地然る折節蟠海は。師國時夜叉隨オクリ悠々とこそ。地出で來り兼定公に打向ひ。詞改めて蟠海を參内せよとは何事の。趣きなるぞとありければされば。此度僧都の加持大護摩の德に依つて。親王御惱平癒あり感悅の餘り。今日より大僧正の位階を授け給はる。綸旨目出度く領掌なさるべしと披露ある。蟠海ムウ愚志の程過分なりと。地挨拶の内甚五郎目を離さず。蟠海の。顏打守りはつとばかりに聲を掛け。詞何時ぞや天子と僞つて細工を望むは御坊よの。ぬく〳〵と騙されて今の憂目は何事ぞや。地サア母を返してたべ。エ、怨めしい腹立つとスエテ怒りの涙せき敢ず。地まさご雪姫聲震はせ。あら憎や情なや。皆是御坊の惡心より。いづれも非法の最期の恨み。思ひ知らさで置かうかと。三人一度に口說き立てフシ大聲。上げて歎きける。詞蟠海ちつとも騷がず。ヤア甚五郎。親王と僞りしは紛れもない某。是何故ぞ。天子として戀慕に死するを救はんため。暫く王位を學んだり。斯程に慈悲を惠む我。何しに契約違へんず。地それ〳〵師國召人引けと聞くより早や。甚五郎が母と妻繩付ながら連れ來れば。親子三人顏見合せフシ先立つものは涙なり。地蟠海二人が繩を許し。母が義は勿論。女房迄を尋ね出し供し來つて相渡す。サア請取れと詞の下。甚五郎は頭を下げ忝しと一禮す。母涙ぐみ頭振り。たとへ此身は遁るゝとも。我子死すれば生き甲斐なし。繩掛け給へと搔き口說けば。地女房も物憂げにフシ互に。義信を立つるにぞ。詞蟠海は打頷き。ヲヽさぞあらん〳〵。コレ兼定。召人どもが一命を我に免じて助けてたべ。甚五郎は僞りにも天子の詞を重んじて。細工を挑むは忠の道。地雪姫事は親王が病になる程戀ひ慕ひ。今又罪に附せんとは照る日の曇る政道。何にもせよ慈悲は上から助くるは法のため。思ひ立つた命乞ひ是非貰うたおくりやれと。フシ只一筋に言ひかくる。地兼定公聞きもあへず。詞和は仁の基なれども刑罰なければ亂の端。利益の道はお僧の役。朝政は又臣等が役。其上綸言還らずと。地云はせも果てず蟠海綸旨を取出し散々に引裂き捨て。ヤア綸言の

綸旨のとは王法を立つる上。濁れる祿を何かせん。否でも應でも貰ひかゝつた召人。ソレ師國時夜叉と聞くより早く駈寄りてッシ皆縛めを解きにける。詞雪姫は差寄つてコハ忝き御心やされども妾が身の上より。地悲しきは夫の命お救ひあれと手を合す。詞兼定は聲を上げ。ヤア不覺の人ッシ再び驚くばかりなり。地色蟠海狼狽へ逃げ廻るをどつこえやらぬと躍り出で。其儘縄をかけければ縄部も續いて立掛かり。師國時夜叉兩人を捕つて伏せ働かせず。縛り上げて突据ゑたり。地かゝる所へ親王は出御ましまします御有樣丈に餘れる下髮に十二一重の優姿始めて女帝と知られたり。兼定は悠々と蟠海に差向ひ。詞エ、是非もなき行跡やな。天性不道にましまします故天子を女帝と知らせなば必定輕しめ謀叛の種と幼少より。皇子と稱し涸さへ。此度の無體の戀慕も。御身の疑ひ避けんとての企て地猶も惡心探らんため刑罰烈しく取行ひ。第一は千王が死したりと聞き給はゞ。虚に乘ずるの謀叛の色現れんと。計るところ案の如く此仕合せ。今此縄目に愧ぢ給へと。ッシ理立てゝ制せられ。蟠海は差詰り詞も出ず赤面す。地帝御氣色穩かにいかに兄宮。詞同じ血筋の帝位をば左程迄疎み給はずとも。女のすなるまつり辛苦を憐み緣となり。地惡心止まりたべかしと。スエテ御涙にくれ給ひ。詞暫くありて。ヤア雪姫。詞我故樣々の難儀は不便さりながら。たゝまぬ思ひは目の前の女姿に明けし。地色さて又汝が小町の圖。佛神擁護の筆の妙。感ずるに餘りあり。向後朕が繪所と譽を世上に知らすべし。地甚五郎も雪姫に同じ恩みの細工の像。何れも稀代の重寶たり。褒美として日の本の細工の司と銘すべし。詞次にまさごは夫に違ひ。神妙の志。甚五郎を狙ふ由度會源五は朝敵故たとへ討たでも遁れぬ命。地汝が事も夫につれ重類を絶つ罰なれども。貞節に免じて命を助け稚子を瀧口に召し出し。詞度會源五と改むべし然れば夫は蘇生の心。其上何の敵あらん。地必ず仇を殘すべからず。皆々其旨心得よと。云ふに妙

なる綸命に。いづれもはつと感じける。詞兼定は詞を正し。御同胞とは云ひながら政道は背かれず。地蟠海僧都は隱岐の嶋へ遠流せしめ。さて又師國時夜叉は臣として君を諫めず。朝敵となる大罰禁外へ引出し刑戮に行へと仰せを請けて追ひ立つる。是を手本の善の綱。僧都を懲し我君を祝ふ御國は忠臣あり孝行あり貞節あり。藝能迄も滿ち〳〵て榮行く。春こそ久しけれ。

右之本遂吟覽頌句音節墨譜等不
違毫釐令加筆且以著述之全本令
校合畢尤可爲正本也

豐竹上野少掾印

作者　紀海音

大坂上久寶寺町三丁目
正本屋　西澤九右衛門版印